

2014-15 年度・会長方針

1. 会長主題

「継続するクラブ活動を進めよう！」

我がクラブは総員8名と云う、少人数のクラブです。その中でクラブメンバーが如何に個々の力を発揮し、クラブを継続させるかが喫緊の課題であると考えます。

2. 活動方針

「地域奉仕活動・Yサ活動」

特に上記二つの活動に力を注ぎたい。

3. 活動計画

「地域奉仕・老人介護施設での Hammond オルガンによる音楽会」

「Yサ活動・YMCA の LD 児教育のバックアップ(高原でのイワナ釣り、バーベキュー等)」

「会員増強・リーフレットを使い PR、リーダーたちへの勧誘」等です

7 月第 1 例会 (POM) 報告

日時: 6 月 22 日 (日) ・ 16:00-17:00

場所: 名古屋市休養温泉「松ヶ島」
会議



(浴衣掛けの会議も乙なもの、話は順調に進んだ、さあ次は食事)

1. 会計引き継ぎ・後藤

(1) 第 2 例会 (6/26) で鈴木さんと引き継ぎ作業を行う。

(2) 今後のスケジュール

a. 7 月第 1 例会 (7/10) に大西新中部部長クラブ訪問。

b. 他スケジュール (1 面参照)

POM 懇親会



(27 年目のクラブ創立記念月、いま人数は少ないが「山椒は小粒でもピリリと辛い」と言われるようなクラブでありたい、頑張ろう)

7 月第 2 例会報告

日時: 6 月 26 日 (木) ・ 18:45-19:45

場所: 名古屋 YMCA 会議室

1. 連絡事項・後藤

(1) 今年度決算概略	前期繰越額	115,270 円
	今期収入	764,948 円
	今期支出	771,089 円
	次期繰越額	109,129 円

(2) 今期決算書、次期予算書、年間計画書

7 月第 1 例会で資料配布し説明する。

2. YMCA 連絡・西野

(1) 日和田キャンプ場準備作業 (1 面参照)

(2) パレットキッズとのマス釣り会

パレットキッズのキャンプ日程は 8 月 22 日-24 日、その最終日 (24 日) に実施の予定 (プラザの回答待ち)。

3. 前項 YMCA 行事の補足・榎田

(1) 2(1) 参加・榎田、後藤、島崎、保留・大島、鈴木

中村総主事 7/12 溪流釣り同行の意向、榎田打ち合わせ。

(2) 8/24 (日) の詳細は、8 月第 1 例会で説明する。

老人ホーム音楽慰問

6 月 8 日 (日) は小澤さん主催で、プラザクラブ、想念寺子供コーラス「ポコ・ア・ポコ」、Hammond オルガン奏者鈴木郁子さん、ギター稲場禮子さんの協力によりアミーユ豊山で開催する。

メンバー 5 名と想念寺の名古屋インターアクトの皆さん 5 名が、小澤さん宅に 11 時半に集合、楽器を積み込む若い人の助けがあり、我々年輩者は大助かりだった。

アミーユ豊山には 1 時に到着して演奏準備をする。2 時に稲場さんの名司会で開始、ホーム入所者及び保護者合わせて 28 名の方が参加して演奏に聴き入る。浜辺の歌から数曲オルガン演奏、ポコ・ア・ポコの皆さんたち 8 名 (5 歳児 3 名、インターアクトクラブの高校生 5 名) が、鈴木先生の演奏に合わせて合唱、参加者の盛大な拍手で進む。その後稲場さんのギター弾き語りで独演が続く。

1 時間余りが短く感ずる時が過ぎ、最後にオルガンで「燃えよドラゴンズ」の演奏で終わる。参加者の皆さん楽しそうだった。最後に入所者の皆さんの健康を祈り散会する。

(高田 廣)



(同じ世代の人たちが「青い山脈」を合唱する姿に複雑な思いか)

西日本区大会参加報告

6月14(土)15(日)にシンフォニア岩国で開催される西日本区大会へプラザから大島、鈴木、高田さんの4名が参加。私は14日10時半の代議員会に出席のため3人とは別行動。岩国は主任の時の部会に出席して以来の訪問になります。前回新岩国から岩国に入ったときは随分と山奥に来たなという印象があったが、在来線で徐々に岩国へ入ると風景になじんで特別の印象はなかった。

大会会場では昨年と違いのんびりとした気持ちで大会に臨み、16時ころに終了してチャーターバスに手際よく乗せられて、ホテルにチェックイン。小都市のため分散しているホテルと錦帯橋そばの岩国国際観光ホテルの分散会場への誘導も無駄がない。随分と工夫が思われる。岩国名物のおしずしやおおひらなべ等をごちそうになり、20時40分ころにお開き。バスに間に合わないタクシードで自前ということで、慌ただしく乗車。

翌日は、私と鈴木さんと高田さんは大島さんと別行動。岩国観光でハイヤーを予約。親切な運転手で気分もいい。錦帯橋周辺の観光で昼頃になり、新岩国駅で昼食と思っただが、店がなく断念。地方と都市の格差を感じる。駅で鈴木さん高田さんと別れ私は小倉へと向かいました。(島崎 正剛)



思い様々な三陸旅行

6月1日、県営名古屋空港を発ち「いわて花巻空港」に到着、ここを拠点に陸前高田、大船渡、釜石、宮古、田野畑、久慈とバスと列車を乗り継いで三陸鉄道沿線を巡る3日間の旅をした。参加された方には400字ほどでこの旅の印象をお願いします。

◆被災後の岩手県を訪ねて・大島孝三郎

2泊3日で陸前高田市ほか三陸の地域を視察した。二つのホテルでは従業員の心のこもった対応と深い感謝の言葉を受けた。現地ガイドとバスガイドからもこの訪問に対して深い感謝の言葉が述べられたことが印象的であった。恨みがましいことは言わず辛抱強い人々だという感を持った。

陸前高田の街は道路以外建物がほとんど流されて更地のようにになっていた。土地を嵩上げする計画がまだ緒に就いたばかりのようで、長い時間が必要であろう。車も人もほとんど見かけず、避難生活を余儀なくされている

ためであろう。

三陸鉄道の南北リアス線が全線復旧したが通学生などには特に嬉しいことであるという。沿線の景観はまったく美しく、これからもずっと守り続けてほしい。

マスコミの報道が次第に少なくなっている。奇跡の一本松を心に刻み被災地のできるだけの早い復興と生活の改善を願い、少しでも支援を継続しなくてはならないと思う。



(15mの津波に襲われた道の駅「高田松原」が残されていた)

◆君、強く生きろ・櫛田 守隆

旅行2日目の陸前高田では、ボランティアガイドさんがバスに同乗して震災被害や復興状況を説明してくれた。バスは津波で流されて草が生い茂った更地の市街地跡を走る。所々に高さ13mほどの台形の盛り土がある。これは120mの山を40mまで削って粉碎し、街まで巨大なベルトコンベアで運んでかさ上げた造成地である。

ガイドさんはポツリとこんな話をした。『避難場所に津波が迫り、急いで裏山に上がるとき、お尻を押され「早く」と促す声をした。必死によじ登り振り返ると、女の人が流されて行くのを見た小学2年の男の子は、このことを1年の間親にも話せなかった。』

先月号に載った高田さんの「防災に学ぶ」では三陸地方の言い伝えで「津波てんでんこ・肉親にも構わずてんでに逃げろ、自分は助かり他人を助けられなくともそれを非難しない」との不文律がある。悔やむな、君は「生かされた」と思い、これからは自ら強く生きることです。



(気仙川の護岸工事で動く油圧ショベルを前景に「奇跡の一本松」)

◆旅行者大歓迎です・後藤 猛

6月1日(日)~3日(火)、復興視察旅行に岩手県に行ってきました。初日は陸前高田のホテルへ直行、次の日の午前中、現地ボランティアの案内は、町全体が流失した

跡地で被災状況の説明から始まりました。

16mほどの津波が押し寄せ、流失した跡地に18mの盛土をして公共の施設を造るそうです。流失前は商店や住宅街であった所が、未だ更地のままです。現地の方々は今も不自由な仮設住宅住まいで、高台に移住し土地を求めても流失した土地との差額が余りにも大きいので、今後どうすべきか思案しているのが現状だとの事です。

奇跡の1本松のレプリカ作りに1億数千万円ものお金が募金で集められた。そのお金を一般の人たちに寄付して頂いた方がより嬉しいとも仰っていました。

陸前高田市職員の数も減り、名古屋市から派遣職員たちの応援を大変喜ばれていました。また、私達のような旅行者は大歓迎だとのことです。



(雑草が生い茂った陸前高田市の元市街地・高台のホテルから撮る)

◆遅く帰ってきたメガネ・高田 廣

小生にとってこの旅行で嬉しかったことが一つある。旅の最終日、花巻空港に到着してメガネのないのに気が付く。天気が良く、紫外線が強くて目の保護にサングラスを使用していた。夕方普通のメガネに替えようと探すが、メガネがない。添乗員の田中さんにバスに置き忘れていないか、電話で聞いてもらえないとの返事。家に帰り再度カバン等を点検するがない。最終日に宿泊したホテル、昼食をとった琥珀博物館等、心当たりで電話して確認するがない、諦めるしかなかった。



(海拔20mの三陸鉄道北リアス線田野畑駅にも津波が押し寄せた)

ふと三陸鉄道の田野畑駅から列車に乗ったことを思い出し、電話をしてみた。駅員が明るい声で対応してくれた。「ケースに入ったメガネの忘れ物をお預かりしています」と落とし主を待っていてくれたかの様な返事が返ってきた。小生にして見ればメガネは体の一部である。

我ながら落し物と言う旅の思い出を台無しにしかねな

い出来事を、一瞬にして吹き飛ばす良い思い出となった。

わたしのたからばこは、どこにいったかな？

気仙沼市 南気仙沼小学校一年 佐藤 礼奈

三月十一日の、つなみでおうちがながされてしまいました。わたしは学校のかえりみちとても大きなじしんがありました。こわくてしゃがんでいて、ちかくのひとがきて「学校にもどりなさい」といわれて学校にもどりました。それからすこしたってつなみがきました。わたしは二かいのしゆうかいしつについてつなみをみました。おじいさんと、5さいの男の子がながされました。こわくて泣いてばかりでした。でも六年生のお兄ちゃんやせんせいが「だいじょうぶなかないで」と言ってはげましてくれましたが、パパやママはまだむかえにこなかったのです。

つぎの日のおひるごろ、じえいたいのがきて車でKウエーブまでつれていってくれました。パパがむかえにきたのは三日目でした。ママとおじいちゃんとおばあちゃんともうとは、どうなったかととてもしんぱいでした。ママたちにあえたのは、四かめのよるでした。そのときにたべたおにぎりはとてもおいしかったです。二ヶ月たってもまだひなんじょにいますがじしんがくるとこわいです。うみをみるとつなみがきているみたいでこわくて泣いてしまいました。おうちにあったわたしのたからばこは、どこにいったかな？ はやくかぞくぜんいんでわたしのうちにすみたいです。(文藝春秋発行「つなみ-被災地のこども80人の作文集」より)

聖書の言葉

【わたしはまた日の下を見たが、必ずしも速い者が競争に勝つのではなく、強い者が戦いに勝つでもない。また賢い者がパンを得るのでもなく、さとき者が富を得るのでもない。また知恵ある者が恵みを得るのでもない。しかし時と災難はすべての人に臨む。人はその時を知らない。魚が災いの網にかかり、鳥が罠にかかるように、人の子らも災いの時が突然彼らに臨む時、それに関わるのである。(伝道の書9.11-12)】

【人間は、物事がいつ起こるかという「時」を知ることには出来ないものだ。安穩に暮らしている魚が突然にして漁師の網にかかってしまう。悠々と空を飛ぶ鳥が一瞬にして罠に落ちてしまう。それと同じように、どんな人もまた突如として災難に見舞われてしまう。(白取春彦著・超訳 聖書の言葉より)】

【「天災は忘れられたところにやって来る」の警句は、物理学者で随筆家、俳人、「吾輩は猫である」に出てくる寒月君のモデルらしい寺田寅彦の言葉だと言われているが、彼の著作にはそのような記述はない。弟子の一人中谷吉郎が著作にあると紹介したのは『寺田との会話の中で度々登場したため誤解したものであったと、随筆「百日物語」などで訂正している』。因みに高松市の邸址の碑文には「天災は忘れられたる頃来る」とある。】